

高山

高山の原生林を守る会

会報 第 32 号

2000 年 3 月



峠駅周辺観察会

記念すべき2000年最初の観察会は、厳冬期2月6日の日曜日、奥羽線峠駅周辺で行われました。お天気はまずまず。ふかふかの新雪を期待していたものの、溶けだし気味の3月下旬のような雪質は、穏やかな空模様と相まって春到来といった雰囲気、地吹雪ツアー的観察会を期待していた参加者の方は調子が狂ったことと思います。

峠駅前に集合した後、旧駅舎ホーム跡から梅森に続く尾根に取り付き、200mほど登ったところの雑木林を目指しました。途中、長靴の人はかんじきを付けましたが、かんじきを履くのは初めての人が多く、最初は歩きにくそうでしたがすぐに慣れ、その威力を活かして楽しく歩き回っていました。

30分ほど登ったところで、尾根の傾斜がゆるんだ台地場の場所をベースにしてあたりを歩き回りました。今回の観察会のメニュー、アニマルトレッキングでは見つけたのはウサギの足跡のみでした。それでもしばらく追いかけると、複数羽が入り乱れたような跡があったり、トイレがあったりと、そこでウサギがどのように行動したのかみんなで色々想像して楽しみました。もう一つのメニューである雪洞掘りは雪が少なく実現しませんでした。木の根本を利用して簡易なシェルターを掘ることなど簡単なビバーク方法について学びました。

☐ 会報31号の内容に対して月館町在住の長谷部氏から投稿がありましたので、その全文と事務局からの返信を掲載します。

女神山について

長谷部 精(月館町在住)

高山の原生林を守る会会報「高山」第31号(99年12月発行)に対して一文を寄せたく筆をとりました。女神山頂の岩は女神山の象徴としてこの地方の人たちに尊ばれ、一名「雨乞岩」とも言われてきました。この岩に登ると不思議に雨が降り、昔早魃のときには蓑笠姿で祈りを捧げたと伝えられています。古老の話では昭和初期まで実施されました。かつては注連縄を張り、毎年張り替えて尊崇されてきて、地元の人たちは絶対登らぬことにしています。

現在女神山には県内外から大勢の人々が登っていますが、雨乞岩まで登るのには私も心を痛めていました。幸い昨年春、川俣町秋山在住の「女神山を愛する会」会長蓮沼昇氏外会員が、雨乞岩の周囲に鎖をとりつけてくれました。現代にあって雨乞いの行事は行われていませんが、神聖な岩をいつまでも守ってゆきたいものです。

昨年秋に県職員、月館町役場職員、伊達森林組合職員、川俣町蓮沼昇、飯野町伊藤俊英、月館町長谷部茂の各氏と私で、女神山の景観・保護対策を山頂で話あいました。山頂附近も立木が伸び放題に伸び、360度展開でみえるものも大分見晴らしが悪くなっていました。また、東斜面にはカタクリの群生地があり、群生地に影響を及ぼさないように注意を払いながら立木を伐採することにしたものです。

私の友人で、一昨年ふくしまテレビが選んだ「うつくしま百名山」に半分以上登ったのが居りますが、せっかく頂上まで登っても立木が繁りなにも見えなかったという山も幾つかあったと話しています。月館町、川俣町の地元では登山者のために春秋道づくりをし草を刈り、大雨の災害があって登山道が荒れたときにはその修復に心がけています。私たちは登山者へのサービスを主にするのではなく、私たちが誇りとする女神山を大切にしたい心でいるものです。



カタクリとヒメギフチョウ(齋藤 忠雄氏撮影)
農業と農村の活性化ビジョンより



女神山頂上から

事務局からの返信

里山は地元の方々によって、守られていることがよく分かりました。特に山頂の雨乞岩に関しては、初めて訪れる者は知らない場合が多く、後世に伝えたいものだと思います。しかし長谷部さんの言う通り「登山者へのサービスを主にするもの」ではないとはいえ、山頂に付けられた展望覗きパイプや山頂付近の伐採には疑問も残りました。パイプは雨乞山であった山頂の景観を損なわせ、伐採は展望の代償にしては余りにも大きいように思えました。山頂のパイプや展望のための伐採は「登山者への誤ったサービス」であると思いました。

山頂からの展望は、確かに楽しみなもの。「うつくしま百名山」を半分以上も登った方でさえ、山頂の展望を望んでおられます。しかし山頂が素晴らしい雑木林で覆われている山もまた魅力なのです。女神山の残された雑木林は実に美しいものです。福島をたくさん登っても、何が大事で、何が魅力かが分からないことは残念です。そしてその様な方の意見にのみ傾聴し、女神山の森の良さをなぜ、活かさなかったのか残念で仕方ありません。伐採された山頂周辺は、近い将来イバラが繁殖し、またそれを刈る必要が生じるかも知れません。

今回の観察会で、多くの発見がありました。中腹の森では、萌芽更新技術を長年行ってきた貴重な地元の先人の営みの後が多く残されているのが、他の山にない女神山の価値であると感じました。その山の頂上部での伐採や後継樹の伐採がされているのは、これまで女神山を守り育ててきた地元の先人の苦勞に報いることではないはずです。カタクリの群生地は適度な土壌水分が保持されていることで生息が可能であるのです。頂上部のただでさえ乾燥しやすい条件であるところに、伐採はより乾燥を早め、登山者によって運ばれるキク科の野草の繁茂を促進する可能性があります。山は木によって守られていることを忘れてはなりません。

私が初めて女神山に登った20年前から素朴な里山の雰囲気が好きで何度か訪れました。しかし近年登って落胆したのは20年前には無かった七ツ森林道が開かれ、大雨で土砂崩れした林道であり、山頂周辺の風景（パイプや伐採）でした。「うつくしま百名山」の本で田部井淳子さんは『「うつくしま百名山」に選定された山々については、あえて百名山の標識などを立てるべきではありません。標識自体が自然を壊すゴミになるからです』とあります。自然を自然のままに残すことの大切さを語ったものです。

女神山には長谷部さんたちが取組んでおられる登山道の草を刈る程度で十分であると思いました。今後パイプを外すことや、将来山頂周囲の森が育った場合の森のあり方などを地元の皆様で話されることをお願いします。そして長谷部さまのおっしゃる通り、「誇りとする女神山を大切に」で、登山者への誤ったサービスではなく、これからも美しい里山を大切に頂けることをお願い致します。

(文責 奥田 博)

穂積 正 さん 歌集「信夫野」(私家版)を出版

「高山の原生林を守る会」創成期から代表をつとめ、現在では顧問である穂積正さんが、この度歌集「信夫野」を上梓しました。この歌集は、穂積顧問の半生を綴ったものです。「高山の原生林を守る会」活動に関わる内容も歌に詠まれています。ここに高山に関係する数編を発表します。読んでみたい方は、既に絶版状態ですので、図書館等で手にして戴ければと思います。



高山回顧

為政者は通年観光資源
とし高山へスキー場開
せんとうす

高山を開発せんか生活
水干魃・水害市民は苦し
む

高山はふるさと随一の原
生林伐採せんか復帰無
からむ

高山の緑のダムは水護る
破壊せんか市民恐慌

☐ 女神山観察会に参加された齋藤 勉さんから寄稿がありましたので紹介します。

女神山観察会に参加して

齋藤 勉

昨年、土湯の” 榎ヶ森 ” 観察会に続いて、今年も会員の方から観察会へのお誘いをいただきました。とても楽しみにしていたお誘いでしたので、夫婦で参加させていただきました。12月になってからの山歩き、初冬の森の様子を観察しながら、ゆっくりと歩くところが、この観察会をとても気に入っている理由のひとつです。また、配布される「ガイドブック」も素朴で手づくりの暖かみを感じます。何よりも一番いいのが、代表の高橋さん、佐藤さん、奥田さんと会員の皆さんがつくりだしている和やかな雰囲気が何ともいえません。

今回の女神山観察会も昨年と同様、とても楽しい一日となりました。標高599mの山頂までは、3つあるどの登山口からも、普通に登れば30分程度だと思われそうですが、私達は「堀切口」からのルートで高橋さんと一緒に「冬の樹木観察会」ということで、色々な” 冬芽 ” を探しながら歩きました。” 虫管(虫こぶ)” という珍しいものも見つけました。カエデ・コナラなどの樹木の落葉や木の実を拾ったり、野鳥の声と名前も教えてもらいながら、1時間30分程かけてのんびりと頂上へたどり着き、女神山のよさをじっくりと観察できました。

カタクリ平付近や頂上付近の伐採は無残で、頂上広場の整備は、あまりにも” やり過ぎ ” の感じが強く腹が立ちましたが、頂上からの360度の眺めに救われました。お天気は、” あられ ” まじりの時雨模様でちょっと残念でしたが、初冬の山の雰囲気を感ずるには丁度よかったです。観察会の後は「つきだて花工房」のお風呂で暖まり、恒例のスライド上映の後今年は「総会」にも参加しました。活動報告、高山を含めた森のお話、意見交換会で色々教わることができて、とてもよかったです。来年予定されている活動計画もとても興味があり楽しみです。これを機会に入会をしたいと思っています。観察会などを通して、森の様子を「見て」「感じて」、身近にある美しい森が長く維持できるよう、活動に参加させていただければと思います。どうぞよろしく願っています。

新たな地域管理経営計画の概要と高山

一昨年に行なわれた国有林野の制度改革に伴ない策定された、地域管理経営計画及び実施計画については、昨年の4月会報にて概要並びに当会としての意見を掲載致しましたが、計画年度が旧制度によって策定された流域毎の施業管理計画との調整により、阿武隈森林計画区(白河～福島の中通り地域)について平成12年度～16年度の5年間を新たな計画年度とし昨年12月に決定されました。

前回の計画策定の際は原案の縦覧及び意見書提出を行なってきたところですが、今回は情報収集の遅れより意見提起の時期を逸し、反省の残る結果となってしまいました。しかし計画内容は前回計画と大差なく、森林保護の面からみた場合でも進展も後退も無い状況となりました。

今後の対応としては、高山の機能類型区分の見直し(自然維持林への編入)を5年後(平成16年夏頃)の次回計画策定を睨み福島市を始めとする関係機関へ働きかけしていきたいと考えております。

なお、決定した計画は、各森林管理所(旧営林署)で閲覧できますので、興味のある方は是非ご覧下さい。また、概要等については、下記に示します。

機能類型別面積の前回計画との比較

機能類型区分	タイプ	目的	現在計画	次回計画
水土保全林	(国土保全)	災害の防備	7,756 ha	7,776 ha
	(水源涵養)	渇水緩和・水質保全	38,258 ha	39,465 ha
森林と人との共生林	(自然維持)	森林、野生生物の保護	6,998 ha	6,997 ha
	(森林空間利用)	レクリエーション利用(スキー・ゴルフ)	9,008 ha	8,519 ha
資源の循環利用林	(林業生産活動)	木材生産・その産業活動	30,587 ha	29,681 ha

高山周辺の伐採計画

7林班な1、2小班	男沼林道台ヶ森山・南西斜面	ミズナラ等20%択伐(薪炭材の供給)
37林班わ3小班	高山登山道瀬峰南西斜面	ミズナラ等20%択伐(薪炭材の供給)

東北ブナ紀行(3) 奥田 博

2回にわたって白神山地のブナを取上げました。今回の藤里駒ケ岳も田代岳、白神山地の端っこに連なります。都合6箇所を紹介したことになりますが、白神にはまだまだ他にも我々の知らない素晴らしいブナの森が存在するはずですよ。

5) 秋田県・藤里駒ケ岳

藤里駒ケ岳は、平坦な白神山地の中では尖ったピークを空に向けて、目立つ存在だ。藤里駒ケ岳には、秋の紅葉の盛りに訪れた。長い林道を車で走って奥に入って、青森県境の山並みが見えてきて驚いた。稜線から谷に向かって一帯には皆伐された斜面が広がっていた。奥の人目の付かないところは、丸裸とはお寒い。間もなく、林道も終点となって、歩き出す。すぐに大きな田苗代湿原が現れた。草紅葉の中に木道が敷かれている。この湿原を越えるとブナ林に入ってゆく。紅葉が盛りで、ブナの葉は黄色に輝いて美しい。カメラを構えてばかりいて、少しも進まなくなった。相棒はたまりかねて、先にどんどん行ってしまう。冷水分岐を過ぎて、次々と現れる見事なブナを写真に収めていた。太いブナではないが、青年期の勢いを感じるブナであった。ブナ林からかん木となったのでピッチを上げると、間もなく頂上であった。この山には、他にも二コースあって、それぞれにブナを楽しめる。



■ (コースタイム) 登山口 (10分) 田苗代湿原 (30分) 冷水分岐 (40分) 山頂 (1時間) 登山口

6) 秋田県・田代岳

田代岳は、白神山地の東端にそびえる山である。ブナの山というよりは山頂部に湿原を持つ山として知られる。登山口は5ヶ所あるが、荒沢コースをとる。大川目川沿いの道に入ると直ぐに太いブナの木が現れる。水場も現れて、しっかりと補給して登り出す。巨木が多く、その度に写真を撮りながら進む。尾根の登りが一息付いても、ブナの見事な木が、次々に現れて飽きさせない。何合目という表示が、ブナの木などにくくり付けられて、美観を損ねている。あまり意味の無い表示にガッカリとさせられる。それにしても、見事なブナが、見事に続く。ヒョッコリと大きな湿原帯に飛び出した。池に岩木山の姿を映して美しい。静寂の山にあって、ひっそり池が点在している様子は、心打つものがある。しばしの登りで、大きな神社のまつられた山頂に到着した。山頂からは、岩木山と藤里駒ケ岳が大きくそびえていた。帰路も往路を下ったが、登りで撮ったブナを、朝とは違う光で、また撮った。登山口近くの水場で飲んだ水は、甘くておいしい。これもブナの森の恵みだ。



■ (コースタイム) 荒沢登山口(1時間)六合目(40分)田代岳山頂(5分)田代湿原(1時間20分)登山口

吾妻・安達太良花紀行7

佐藤 守

アブラチャン(*Parabenzoin praecox* クスノキ科シロモジ属)

落葉灌木で山地のやや湿ったところの林縁に植生する。吾妻連峰ではクロモジ属のオオバクロモジが良く知られているが、シロモジ属のアブラチャンはあまり知られていない。本種は長野、静岡以西に植生するシロモジの仲間。雌雄異株で花芽は、クロモジと同様に頂芽の葉芽の両脇に提灯状に2個着生する。一つの花芽から3~5個の花を咲かせる。花はクロモジよりも大きく、鮮やかな黄色であり、クロモジと異なり葉芽が開く前に総状に咲くので遠くからでも良く目立つ。マンサクに次いで開花が早く、キブシ、パッコヤナギとともに、里山の本格的な春



を告げる。開花期間は雌株より雄株の方が長い。これは、アブラチャンはハエ類を受粉の仲人とする虫媒花であるが、ハエ類はハナアブと比較して気まぐれで、特定の雄花を集中して訪れる確率が低いためにアブラチャンがとる繁殖戦略である。響きが植物の名前らしくないが、漢字で書くと‘油瀝青’となる。「青」は中国語で「チャン」と発音することからアブラチャンとなったらしい。「瀝青」とは一般的には天然アスファルト類を指す。その昔、灯りをとる油を樹皮や果実から搾油していたためにつけられたらしい。透きとおった黄色の小花をたわわにつけた姿を見ると、気のきいた可愛い名前をつけてあげたいと思う。クロモジと同様、枝の切り口からは芳香が漂う。

ウスバサイシン(*Asiasarum sieboldii* ウマノスズクサ科カンアオイ属)

山間部のやや湿った樹林下に植生する夏緑性多年草。地下茎の先端から2枚の葉が偽対生状に伸びて、その葉の付け根の分岐部に1つずつ花をつける。先が3裂した暗紫色の壺状の花姿はがく(がく筒と呼ばれる)で花弁はない。がく筒には無数の縦溝と白い斑点が入る。がく筒中では6個の花柱(雌しべ)の周りを12個の雄しべが囲む幾何学的な配列を見せる。葉形は基部が深くえぐれ、尖った葉先の心臓形。カタクリやスミレサイシン、ミヤマエンレイソウ等が咲きそろった春の林床の落葉中に埋もれるように花を咲かせる。吾妻連峰に植生するウマノスズクサ科の植物は本種



のみである。「春の女神」ヒメギフチョウ幼虫の食草として有名で、食草に起因してヒメギフチョウから分化したとされるギフチョウとの生息域はルードルフィアラインと呼ばれている。なおヒメギフチョウの県内での分布域は会津と県北地方のみであるが、大半の産地で絶滅している。これは里山自然林の伐採等によるウスバサイシン・カタクリ群落の消滅と無関係ではない。

暖冬に慣れてしまった中で、今年の冬は異常に暖かだった1月を除けば、久しぶりに「冬らしさ」を実感できたのではない。2月中旬には猪苗代湖の湖岸も数百メートルにわたり、何年か振りで結氷したと聞いたが、3月も半ばを過ぎ、序々に春の気配を感じるようになった。日当たりのよい道端ではマンサクの花がほころび始め、谷川の水音もどことなく力強さが増したような気がする。

そんな春の訪れを待ちわびていたかのように、雪解けが進む溪流で真先に元気な姿を見せてくれるのがミソサザイやカワガラス、キセキレイなどの水辺を好む鳥たちである。その敏捷な動きや体に似合わず大きく澄んだ鳴き声は、奥山の森に春を告げる妖精のようでもある。

ミソサザイ(鶺鴒) スズメ目 ミソサザイ科 「留鳥」

ブナ、ミズナラなど広葉樹の森を流れる溪流に雪解けが進み、地肌が見え始める頃、高音でしかも大きな鳴き声が響きわたるようになる。鳴き声の主は、褐色で丸い体に黒い横斑や灰白色の斑点が混じる体長10cmほどのとても小さな鳥、ミソサザイである。首おした岩にとまり尾羽をツンと立て、くちばしを大きく開いて囀る様子は、一生懸命のようで愛らしく、けなげに見える。溪流沿いの森に縄張りを持ち繁殖しているが、雌へ求愛行動以外に縄張りを他の個体へ誇示することも含め、大きな鳴き声を出すらしい。

一方、真冬に低山や人里に下りている場合の地鳴きは想像できないほど地味でウグイスと同じようなチャッチャという声である。しかし、この地鳴きが聞かれた人里の中小河川の多くは、3面コンクリートで固められた水路に改修されてしまい、山間の村や心有る人々によった。かつては、自宅裏の2メートルほどの小川でも見る事ができたこの鳥をもう一度呼び戻してみたいと思うのは過去への郷愁だけではない。



カワガラス(河鳥) スズメ目 カワガラス科 「留鳥」

水芭蕉の群生地として知られる仁田沼周辺には、今でもミズナラやカエデなどの雑木林が多く残されている。それらの雑木林に生まれ、水芭蕉とともに見頃となるカタクリ、キクザキイチゲなどの可憐な草花は多くのハイカーの目を楽しませてくれるが、ハイカーの少ない平日はこれらの草花のほかに、多くの野鳥たちが出迎えてくれる。

その日も、4月半ばの人影の少ない平日の早朝だった。朝露に輝く花々をカメラに収め、ふと「思いの滝」に立寄った際のこと。勢いよく段差を下る水流の水煙と轟音の中、滝壺周辺の岸辺で活発に動き廻るムクドリ大で全身褐色の鳥に出会った。こちらの様子を気にすることもなく小石の廻りをつついたり、時には水の中に潜ったりしているのである。体の色彩、身のこなしは時代劇の忍者を彷彿させるようである。やがてそこに腹部が黄色い一羽のキセキレイがやってきた。と途端に縄張りを侵害されたのか、追い払いにかかったのである。しかしキセキレイも易々とは追い払われることはなく、いたちごっこをしていた。私は、そんな光景を飽きもせず、一時間も眺めていたが、その鳥がカワガラスだと知ったのは、何年か後に偶然見たテレビのブラウン管からであった。

(原図 小学館・野鳥図鑑)



◆他会の観察会のご案内(参加する場合は必ず事前に連絡してください)

「福島県自然保護協会」

- ・五色沼雪上自然観察会(北塩原村) 3月26日(日)問い合わせ 024-557-8265 星 一彰氏
- ・山と海 of 自然観察会(新地町・相馬市)4月9日(日)問い合わせ 0242-62-5379 横田清美氏

「カタクリの会」 問い合わせ 0197-82-3601 瀬川 強氏

- ・カタクリの里歩き(岩手県沢内村)4月23日(日)
- ・雪椿と夏の渡り鳥(岩手県湯田町白木峠)5月14日(日)
- ・初夏のブナ林(岩手県沢内村)6月11日(日)

◆次回観察会のお知らせ

第40回自然観察会 「雪ウサギ観察会」

日時 4月23日(日) 9:00~15:00 場所: 微温湯温泉周辺

集合場所: 四季の里正面入り口交差点駐車場 集合時間: 8:00 参加定員 20名

内容: 微温湯温泉から吾妻小富士の裾野まで登り、登山道から「種まきウサギ」の大きさを体験します。

準備するもの: 登山靴、ゴム長靴等、雨具、スパッツ類(登山靴の場合)、防寒具、帽子、手袋、昼食

参加費用 保険代300円(当日) 申し込み 4月22日まで

第41回自然観察会 「ブナの新緑観察会」

日時 6月4日(日) 8:30~15:00 場所: 中吾妻山 集合場所: 四季の里正面入り口交差点駐車場

集合時間: 7:00 参加定員 30名

内容: 以前秋の観察会で訪れたコースですが、今度は生命の営みが満ちあふれる季節に訪ねます。

準備するもの: 軽登山靴、長靴等、雨具、帽子、昼食

参加費用 保険代300円(当日) 申し込み 6月3日まで

会費納入について 2000年会費を5月末日までに納入願います。同封の郵便振替用紙をご利用ください。

振込先 : 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」 年会費: 500円

なお、既に納入済みの方は、勿論その必要はありません。

【編集後記】■10年ぶりに編集担当となった。現在のスタイルを確立されたのは、前担当者の丸山さんである。この10年余りの間に会報も随分成長したものだと思うのは私だけではないはずだ。■穂積正さんの歌を読んだ。久しぶりに高山スキー場建設反対運動当時の「穂積節」に触れた思いがした。自然保護はこうした先人達の蓄積があって成り立つもの、自然観察会をとおしてこの蓄積を次世代に伝えられればと願う。■今回は女神山に係わる内容が多くなった。大半の山は地元の人たちによって守られている。このような善意の人々に、森の生態についての認識が浸透すればと思う。■3月初旬に恒例の高山下りをした。コースは代表が昨春、踏査したエリアで、手つかずの標高差約800m余りのブナ林滑降を満喫することができた。同時に、自然の地形と林相を利用して楽しむ「山スキー」の原点を再認識した。■マンサクが咲き始め、ブナの芽も赤みを帯び、季節は確実に春の装いを整えている。今年もいつものお花畑でいつもの花が咲いてくれることを願う。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第32号 2000年3月発行

編集・発行 : 高山の原生林を守る会

代表連絡先 : 高橋淳一 Phone 024-593-1990(夜間7時~9時)

郵便振替 : 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法 : 年会費(500円)を添えて上記まで

編集 : 奥田・佐藤・阿部・丸山